巻頭エッセイ

vocabulaly, vocabulary, vocaburaly, vocaburary

真野　泰

かわいいような，かわいくないような，ピンクのスポーツバッグに目を引かれた。駅のホームで女子高生が肩にかけていたのである。ピンクのビニールに白い文字で Blass Band と書いてある。しばらく何のことか分からず，おおいに慌てた。これはしたり！　ごく基本的な語とおぼしき blass をわたしは知らんぞ。

それで思い出したのが四半世紀前の話である。司法試験に合格した友人が司法研修所の仲間と草野球のチームを結成，ユニフォームもつくり，胸に Regal なんとかというチーム名も入れた。いよいよ迎えた初試合の日，対戦相手から遠慮がちに指摘されたのだそうだ。ひょっとして，英語，間違っていませんか？

さらに数年さかのぼって1981年。ぼくは大学で英米法の授業を受けていた。先週の板書の royal は loyal の間違いでした，と教授が訂正する。そして照れくさそうに言い足した。いやあ，カンザスシティ・ロイヤルズが来日してたものですから，つい……。

日本語を母語とする人間にとって L と R は鬼門である。ふたつの音を聞き分けられず，発音すれば両方ともラリルレロとなり，綴ればいつの間にかふたつの文字が入れ替わる。これはかなり一般性の高い現象で，昔も今もあまり変わらない。ふつうの若者はぼろぼろ間違え，英米法の専門家のように英語に慣れ親しんでいる人でさえ，ときに足をすくわれる。

大学の授業の余興として「ボキャブラリー」と受講者全員に英語で書いてもらうことがある。数十本の鉛筆やシャープペンが動いたり動かなかったりしている間をぶらぶら見て歩くと面白い。さすがに boca とか voka とかで始める学生は少ない。たいていは vocabu くらいまで簡単に書く。しかしそこで手がとまり，あるいはその先で書いては消しを繰り返す。

学生たちの書く「ボキャブラリー」はじつに個性に富んで多様なので逐一紹介することはできない。そこで最後の「ラリー」にだけ注目し，その箇所でも母音は間違えないものとすると，表題に掲げた四種に収斂する。さて，同じ間違いでも ly で終わる二つは筋が悪い。なぜなら ly で終わる語は圧倒的に副詞が多く，形容詞も相当あるが，名詞はごく僅かなのだから。それくらい分かっていそうなものだが，L と R ですっかり逆上し，気が回らないものと見える。

筋の悪くない間違いは vocaburary である。たとえば honorary や literary，temporary と語尾が似ていて納得する。納得するけれども，間違い。

英語の単語を覚えるときは，文字の並び方をよく観察したうえで，自分の手を動かして何度も書く。そのとき頭の中に音を響かせるというか，それぞれの音を出すときの口の中の形を意識することが大事である。L のときは舌先を上の歯茎にしっかりくっつけ，R のときは舌先をどこにもくっつけない。

L と R の違いを口の中に意識して言葉を覚えれば，たとえ L と R を聞き分けられなくても，それどころかたとえ L と R を本当に正しくは発音できなくても，綴りだけは正しく書ける。こんな話をぼくは今年度の新入生にもするだろう。ついでだからね，いいこと教えようか，と懲りずに今年も続けるだろう。ほら，vocabulary の bulary のところね，u と l の間に rg を入れるとね，burglary となるでしょ，これ住居侵入とか押し込み強盗のことね。今年も一人，二人が深く頷き，ほとんどの学生は変な顔をするだろう。

（まの　やすし・学習院大学教授）